

アフリカの虚像と実像——・矢内原 勝

(慶応義塾大学経済学部教授)

昨今アフリカのマラソン選手の走力には眼をみはらされる。国籍はカナダやアメリカ合衆国であっても、各種のスポーツで活躍する黒人選手にしても、その祖先はかつてアフリカ大陸からブラジルや西インド諸島に奴隷として運ばれてきた人たちである。このような優れた体力をもつ人たちの住む大陸に、飢えに苦しむ人があることも事実である。もちろんアフリカの人たちすべてが飢えているわけではない。アフリカに調査に行く私たちの眼に触れる大部分の人たちは、元気に働いている。しかしサハラ以南のアフリカの人口の4分の1以上は栄養不良の状態にある、と世界銀行は見ている。サハラ以南のアフリカの人口は約4億5千万であって、年々3%以上増加しているから、21世紀の始めには約2倍になると推計されている。食料生産を同じ期間に2倍に増加させるのは困難であろうから、この地域はまだマルサスのわなから抜け出していない。

アフリカは暑い。暑い所もあるし涼しい所もある。乾季には暑くても雨季はしのぎやすい。ジンバブエの首都ハラレは世界で最も住みやすい気候と言われる。アフリカの人たちは裸体か。町の人たちは私たちとさして変らない服装をしている。大型野獣はいるか。いる所にはいるが、動物園が発達していないアフリカでは、自動車は知っているが象もライオンも見たことのない子供がたくさんいる。

アフリカ経済の現状と将来はかなりきびしい。政治的独立は直接に経済的繁栄をもたらさないことは、各国のリーダーたちに認識されてきたと思われる。他方で普通のアフリカの人たちは、普通の生活を送っている。彼らの考え方には私たちと違うものがあるが、同じものもあろう。私たちが異質なものに触れて感動するのはよいが、あまり物珍しそうに彼らを見ないほうがよいと思う。